

平成28年度事業計画書

公益財団法人大阪市博物館協会

はじめに

平成 28 年度、大阪市博物館協会は設立 7 年目、公益財団法人としては 5 年目を迎える。これまで、大阪市から受託している博物館・美術館の管理運営は、当協会設立当時の平成 22 年度から平成 25 年度までの 4 年と平成 26 年度のための計 5 年間の指定管理者の指名を受けた。平成 27 年度以降については平成 31 年度末までの 5 年間にわたり、大阪歴史博物館、市立自然史博物館、市立美術館、市立東洋陶磁美術館の 4 館の指定管理者の指名を受けることとなった。当協会においては各種の事業を施設ごとに、また相互に連携しながら実施しており、平成 28 年度についても 3 ページ以降の事業を予定しているが、ここでは公益財団法人への移行を認定された「協会事業の位置付け」と協会の「平成 28 年度の取り組み」について記しておきたい。

1. 協会事業の位置付け

協会事業を「公益目的事業」「収益事業等」として位置づけ、平成 24 年 4 月から公益財団法人として事業を実施している。

(1) 公益目的事業

この事業については次の 9 事業で構成されており、隣接する分野の事業を相互に連携し総合力を発揮することがより効果的であることが位置付けられている。

- ① 埋蔵文化財の発掘調査と保存科学分析事業（受託事業）
- ② 文化財や博物館関係資料の調査研究事業（自主事業）
- ③ 保存科学分析技術の開発と文化財等資料への応用事業（自主事業）
- ④ 文化財等資料を活用した展示・公開事業（自主事業）
- ⑤ 講座等による教育普及や人材育成事業（自主事業）
- ⑥ 体験活動事業（自主事業）
- ⑦ その他活動（自主事業）
- ⑧ 文化財関連施設管理・活用事業（受託事業）
- ⑨ 大阪市立博物館・美術館管理運営事業（指定管理による受託事業）

(2) 収益事業等

① 収益事業

施設の一部を売店・食堂等として使用することで、来館者サービスの向上やその収益を公益目的事業に充てることを目的とする事業

② その他の事業（相互扶助等事業）

友の会会員に対して行う講演会等を通じて、友の会活動の推進や会員の美術・東洋陶磁に関する公益目的事業に対する理解を深めることを目的とする事業

2. 平成 28 年度の取り組み

- ・平成 27 年度から平成 31 年度まで 5 年間の 4 館に関する「指定管理者指定申請書」における事業計画や新たに作成する経営計画、大阪市経済戦略局が平成 28 年秋頃に策定を予定している「大阪市ミュージアムビジョン」を踏まえ、事業の在り方を検討する。
- ・経営計画の「1 団体のビジョン」を基本とし、引き続き協会として「ミュージアム魅力発信事業」を推進し、博物館施設や文化財事業の発信力を高めるとともに、来館者サービスの向上を目的とした事業にも取り組む。
- ・広報・情報発信をはじめとする事業の実施にあたっては、民間のノウハウを積極的に活用し、市民ニーズをふまえた、効果的な事業実施を目指す。
- ・博物館・美術館や大阪文化財研究所が連携し、「郷土大阪」に対する「愛着」や「誇り」を育むため、「学校の博物館利用促進」や「学校教育支援」に取り組む。
- ・協会は平成 22 年度から 3 年間外部委員による点検評価に取組み、とりわけ平成 24 年度には総合評価を実施した。平成 26 年度には改めてその後の措置状況を踏まえ、外部評価委員会による事業の点検評価を行い、平成 27 年度は提言をふまえた改善を図ってきた。平成 28 年度においては、引き続き改善に取り組むとともに、新たな観点からの点検評価を検討する。

※大阪市ミュージアムビジョン

大阪市の博物館施設が長年にわたって培ってきた伝統と実績を背景として、次代の大阪のまちを築き市民と歩むことを目標に、今後、博物館群としてめざす姿と各館が専門性や特徴を活かして取り組む活動内容を示すもの。

平成 28 年秋頃の策定をめざし、大阪市経済戦略局において検討が進められている。

I. ミュージアム魅力発信事業

大阪市博物館協会では、ホームページの充実やSNSの活用による臨機応変な情報発信をさらに進めるとともに、来館者サービスの向上を目的に、ホームページ・パンフレット・展示解説等の多言語化、観覧料のクレジット決済導入の検討、民間ノウハウを活用したミュージアムグッズ開発、受付などのホスピタリティ向上等の取り組みを進める。

総務部では各館所が上記の取り組みを推進するにあたっての条件整備や調整に努めるとともに、「ミュージアム魅力発信事業」として、以下の取り組みを各館所および関係機関・団体や学校・大学等との連携を図りながら進める。

広報・情報発信については、民間事業者等との連携を図りながら引き続き強化していく。「学校連携」「大学連携」についてもミュージアムの魅力を発信する具体的な取り組みを進める。

1. さまざまな情報発信

各館における展示や施設に関する情報の多言語対応やホームページの充実につなげるため、大阪観光局などの関連部局や民間事業者等とのネットワーク、文化・観光の多様なチャンネルを活かしたプロモーションの強化をはかり、外国人をはじめとした観光客の積極的獲得に努める。

平成28年度は、外国人観光客の博物館施設の利用実態を把握するため動向調査を実施するとともに、外国語版総合案内パンフレットを発行し、広範囲のプロモーションに活用する。また、関西経済連合会主導の外国人観光客向け統一パス「Kansai One pass」への協力や、大河ドラマ「真田丸」大阪推進協議会（事務局・大阪観光局）への参加等により連携を活かした広報を進める。

引き続き「大阪ミュージアムズ」の名称で統一した広報紙・ポータルサイトおよびSNSの発行・運営を通じて、展覧会や各館所の魅力を市民に分かりやすく発信する。

2. 民間事業者との連携、民間のノウハウの活用

平成28年度、東洋陶磁美術館ではBeacon技術を用いたスマートフォン等利用によるガイドシステムの実証実験を開始する。こうしたICTを活用した解説手段や展示機器の導入や、ミュージアムグッズの開発などに各館が取り組んでいけるよう、民間企業との新たな連携を推進していく。市民ニーズに沿って、来館者サービスの向上や各館の魅力発信のため、民間のノウハウを積極的に活用し、効果ある事業実施を目指す。

3. 教育普及に関する連携

(1) 小・中学校との連携

小・中学校との連携については、引き続き学校利用促進チラシ「授業に役立つ利用ガイド」を活用して校園長会や教育研究会への積極的な広報の展開を図るとともに、教育委員会や教

育センターとの連携を深める。また「小中学校の博物館利用の促進」と「学校教育支援」を推進するため、各館・所の取組みを共有するとともに、教員を対象に学校団体の博物館利用を促進するモデル事業「教員のための博物館の日」を自然史博物館において実施する。また市立美術館において実施してきた、学芸員による小中学生の鑑賞会を引き続き推進する。

(2) 大学や他の教育機関との連携

大学との連携については、大阪市立大学との包括連携協定に基づく事業の実施体制について整備を進めたことから、市民向け講演会・シンポジウムの開催、学芸員養成課程の博物館学関連3講座への学芸員の出講、大学教員との共同研究などに計画的に取り組む。また、キャンパスメンバーズ制度については学生の利用促進を図るとともに、私学や専門学校等の参加校の拡大や制度の改善・拡充について検討を進める。

(3) 他館との連携

大阪市立科学館との連携については、キャンパスメンバーズのほか、講座の共催や博物館運営情報の交換などについてより一層の連携を図る。大阪城天守閣とも引き続き連携を図るとともに、ポータルサイト「Osaka Museums（大阪ミュージアムズ）」で情報発信の相互連携を図った市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）を含めて、より一層ミュージアムの魅力発信に努める。

4. 点検評価

各館所による自己評価をもとに、事業の成果と課題を幅広い見地から点検評価する「外部評価委員会」を平成22年度から3年間開催し、平成26年度には改めて平成24年度に実施した総合評価の措置状況を点検するとともに、これを踏まえた外部評価委員会による事業の点検評価を実施し、平成27年度は提言を踏まえた改善に取り組んできた。平成28年度は引き続き改善を進めるとともに、新たな観点を加えた点検評価を検討する。

II. 大阪文化財研究所事業

35年以上蓄積した知識と経験を活かして遺跡の発掘調査と報告書作成を行い、その文化財の保存と保管、研究成果をもとに、博物館・美術館や地域団体等と連携して文化財の公開・教育普及に努める。

大阪市域の埋蔵文化財発掘調査・報告書作成受託事業を事業の中心として優先的に実施する一方、近年における著しい事業量の減少へ対応し、各地の文化財調査機関の要請による学芸員派遣や、市外における文化財の報告書作成・保存処理など経営に資する他の事業量の確保に努める。また、研究所学芸員の減員に応じて効率的に事業を行う。

なお、東日本大震災の復旧・復興支援の一環として、埋蔵文化財の調査と保護のため平成25・26年度の福島県、27年度の岩手県に続き28年度も岩手県に学芸員を派遣する。

1. 埋蔵文化財の発掘調査・報告書作成等

(1) 文化財調査受託事業

難波宮跡をはじめとする市内各地の民間開発に伴う発掘調査約30件に速やかに対応するほか、難波宮跡史跡整備や過去の公共事業に伴う発掘調査の報告書を作成して成果を公表する。また、他地域の発掘調査、遺物整理、報告書作成等各種事業を積極的に受託する。

(2) 保存処理・分析事業

市内遺跡の遺構や出土文化財を保存し、博物館展示等の活用に供するほか、他地域の出土品や文化財の保存処理・分析を積極的に受託する。

(3) 文化財関連施設の管理事業

埋蔵文化財収蔵倉庫の維持管理等、出土品を良好な状態で保存・管理するとともに、地域の文化資産として普及事業を通じた活用を図る。

2. 保存科学分析技術の開発と文化財資料への応用

金属製品・木製品等の保存処理・理化学的な分析を行う。当研究所開発によるトレハロース含浸処理法は国内外から高い評価を受け、鉄との複合材資料や海底遺跡出土木製品を有効に保存できる唯一の方法と考えられている。科学研究費の助成により、研究の推進だけでなく木製文化財保存国際会議(WOAM)をはじめとする学会発表や研究会開催を継続し、普及に努める。

また、保存処理を施した資料を博物館・美術館の展示等で活用するなど、市民への公開を積極的に推し進める。加えて、文化財IPM(総合的有害生物管理)の資格を活かし、博物館・美術館での収蔵・保存・展示環境の調査等、資料の保全について協力、連携を図る。

3. 文化財に関する研究

科学研究費助成事業を始めとする外部資金の獲得に努め、学芸員による文化財や考古学、歴史学に関する共同研究や国際交流を進め、講演会や研究紀要の刊行等で成果を公表する。

学芸員の減員に対応して、研究所の旧職員などの経験や知識を積極的に活用するため、「共同研究員制度」を創設する。

また、韓国の財団法人嶺南文化財研究院をはじめとする、東アジア・ヨーロッパ等の海外研究機関や研究者との国際交流を進め、大阪の歴史と文化財の研究に資する。

4. 教育・普及事業

(1) 発掘調査による資料の活用

発掘調査の成果を直接多くの市民に公開すべく、大阪市教育委員会と協力し現地説明会を開催するとともに、出土品や写真、図等を大阪歴史博物館の速報展示や常設展内での陳列、年度ごとの調査成果を総覧する特集展示「新発見！なにわの考古学」展等で活用する。

また、大阪市立の博物館・美術館等の展示へ協力するほか、各地の博物館・美術館施設、出版社等への資料提供を行う。

また、遺跡に隣接して出土品を展示している各地域の公共・民間施設（市内30箇所の展示施設：「街角ミュージアム」）へ協力する。さらに、難波宮跡公園をはじめとする史跡や、資料の照会・見学に随時、対応する。

(2) 講座等による生涯学習および人材育成

大阪歴史博物館での「金曜歴史講座」・「大阪の歴史を掘る講演会」をはじめとする講座や催しを大阪市立の博物館・美術館と協力して実施する。また、他団体が開催する市民向け生涯学習事業に対し、企画・講師派遣等で協力する。

そのほか、大学や国内外の文化財研究機関からの要請に応じて講師を派遣し、人材育成や技術指導に協力する。

(3) 地域と連携したイベント等への協力

大阪市の博物館・美術館及び地域の団体と連携して、「難波宮フェスタ」等の市内遺跡と出土品を活用した体験イベントや「なにわの宮リレーウォーク」等の見学会、「中央区民まつり」・「古代市（平野区）」等の地域活動に協力する。

(4) 史跡難波宮跡の活用

難波宮調査事務所を活用し、学校教育や生涯学習の要望に応じて、史跡見学対応や難波宮跡をはじめとする出土遺物展示、関連図書の公開等を実施する。

(5) 情報発信

情報誌『葦火』等の図書の刊行・頒布を行い、当研究所ホームページや、大阪市立の博物館・美術館、地域団体と共同で制作した「なにわ まナビ ガイド（文化庁補助金事業で開発）」等を活用して、文化財に関する各種情報やイベント情報を発信する。

(6) 関連資料の収集・管理

文化財に関連する調査報告書及びほかの関連図書等の収集・管理に努め、他団体や個人の活用に供する。

(7) 他団体との連携

全国埋蔵文化財法人連絡協議会へ参加・協力するほか、同協議会近畿ブロックで構成す

る実行委員会に参画し、平成 20 年度以来毎年行っている『関西・考古学の日』を開催する。

5. 大阪市の博物館・美術館との連携

(1) 博物館協会内の連携による共催・協力

大阪歴史博物館において開催予定の特別企画展「都市大阪の起源をさぐる」、特集展示「新発見！なにわの考古学 2016」等をはじめ、考古学と文化財に関する事業で共催および調査・企画・出品等の協力をする。

(2) そのほか

調査・研究、展示、教育普及、広報において、大阪市の博物館・美術館をはじめとする関係機関との連携を積極的に進め、文化財に関する事業及び博物館・美術館活動の活性化に努める。

6. 東北復興支援ほか学芸員の派遣協力

文化庁および東北 3 県から全国に向けた、埋蔵文化財発掘調査のための専門職員派遣要請に応じて公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに学芸員 1 名を派遣する。

そのほか、八尾市・京都市・枚方市等各地の文化財調査機関の要請に応じて学芸員を派遣して発掘調査に協力する。

Ⅲ. 大阪歴史博物館事業

大阪歴史博物館では、大阪の歴史と文化を国内外に発信するとともに、郷土大阪に親しみをもち理解を深めるため、大阪市域の歴史や文化を対象とした展示や事業を中心としながらも、より広い視点に立った歴史系総合博物館としての役割も果たすことができるよう、多彩な収蔵品の活用や他の博物館等との事業連携のあり方を模索していく。開館 15 周年にあたる本年は、これまでの研究成果を踏まえ大阪の新しい魅力を発信したり、高い話題性をもつ特別展を開催するとともに、増加する外国からの来館者に対応するための多言語化の推進に努める。

1. 資料の収集、保管事業

大阪の歴史と文化に関する資料の情報収集に努め、収集方針にもとづき着実に資料の収集を行う。また新規に収蔵した資料については燻蒸を実施し、最適な環境のもとで資料の保管・管理を行う。また修復の必要な資料に対しては、保管・活用のために最適な措置を行う。

2. 展示事業

(1) 常設展示

13 万点を超える館蔵品や大阪市内の発掘調査で見つかった埋蔵文化財を活用し、計画的に展示更新を行うとともに、学芸員による展示解説、ボランティアによるスタンプラリーや体験事業(ハンズ・オン)などを実施する。

また、老朽化による不具合の見られる展示設備については、改修または全面的な見直しを含めて、今後のあり方を検討する。

(2) 特集展示

館蔵品や最新の埋蔵文化財の調査結果にもとづき、地域やジャンル、速報性などを考慮し、大阪の歴史と文化に関わるテーマで特集展示を開催し、リピーターの増加・定着を図る。平成 28 年度については、恒例の展示となっている「新発見！なにわの考古学」のほか、「大阪市の新指定文化財」、「郷土建築へのまなざしと日本建築協会」、「蔵出し名品展 2016」、「名刀の面影―刀絵図と日本刀の美―」、「近代大阪と名望家」を企画し、加えて関西大学との連携による「関西大学蔵 本山コレクションの精華」の計 7 本を予定している。

(3) 特別展示

①特別展「大阪歴史博物館開館 15 周年記念特別展 近代大阪職人図鑑 ―ものづくりのものがたり―」

[平成 28 年 4 月 29 日～6 月 20 日]

東京から離れた大阪の地で、独自の展開を遂げた工芸。本展では職人(アルチザン)の技術力・応用力を再評価し、初公開品を含む数々の「忘れられた」人や作品を紹介することで、大阪の近代工芸の世界を明らかにする。

なお、本展は同時期に開催する東洋陶磁美術館の特別展「没後 100 年 宮川香山」と事業連携を行い、それぞれの半券提示で団体料金とする入館者相互割引を行う。

②特別企画展「都市大阪の起源をさぐる 難波宮前夜の王権と都市」

[平成 28 年 7 月 16 日～8 月 29 日]

上町台地には飛鳥時代の難波宮よりもさらに古い時代から、政治・外交施設や寺院が造られてきた。当時の難波の地形と自然環境を復元した古地理図や、豊富な出土品、発掘現場の写真などから大都市大阪の原点に迫る。

③特別展「2016 年 NHK 大河ドラマ特別展 真田丸」

[平成 28 年 9 月 17 日～11 月 6 日]

戦国武将として絶大な人気を誇る真田信繁(幸村)。その自筆書状や所用の武器・武具、「真田丸」図など同時代の歴史資料を紹介し、信繁の人間像と彼が生きた時代を浮き彫りにする。巡回展ではあるが、大坂の陣関連のものを中心に、本大阪展のみで公開される重要な資料も含まれる。

④特別企画展「コレクションの愉しみ 印判手の皿とアジアの凧」

[平成 28 年 12 月 7 日～平成 29 年 2 月 13 日]

大阪のコレクターが体系的に収集した 2 つのコレクションを通じて、資料収集の愉しみを伝える。30 年をかけて収集された約 1,000 点に及ぶ印判手の皿は、明治から昭和初期の多種多様な絵柄を楽しむことができる。木村薫氏が収集したアジアの凧は、形や絵柄をとおして地域性や時代性を感じることができる。

3. 調査・研究事業

外部研究者を交えた難波宮や大阪学に関する共同研究、ならびに館蔵資料や博物館学に関する基礎研究を実施し、その成果を共同研究成果報告書・研究紀要・館蔵資料集として刊行するとともに、研究の内容をより充実したものとするため、科学研究費補助金をはじめとする各種の学術研究補助金など外部資金の獲得にも努める。

4. 教育・普及事業

学芸員による「なにわ歴博講座」や館長との対話形式を導入した講座「館長と学ぼう 新しい大阪の歴史」、外部講師による時宜に応じた内容での講演会やシンポジウム、市内の遺跡や近代建築を巡る見学会、子ども向けの体験教室等を実施し、市民や子どもたちにわかりやすくかつ水準の高い大阪の歴史・文化を学ぶことのできる機会を提供する。

5. 学校・市民等との連携

教育センターや科目別研究会と連携して小・中学校の教員研修を開催し、教員が主体とな

った学校による博物館利用の促進を図る。大学とは講師派遣や博物館実習の受け入れ、共同研究の実施による結びつきを強化する。さらに博物館を拠点に活動するボランティアや友の会、地域のNPO法人等との共催事業をとおして市民団体との連携を図る。

6. 情報発信、広報宣伝

ホームページの充実を引き続き進めるとともに、フォロワーが増加しているツイッターの活用をさらに進め、臨機応変な情報発信を行っていく。また、周辺商業施設・ホテル等と連携した大阪城公園周辺マップを作成し、広報の強化に取り組む。ポスター・チラシなどの印刷媒体については、掲載内容の充実をはかり、きめ細かいサービスの提供に努める。

7. 来館者サービスの向上

外国人来館者の増加に対応するため展示解説等の多言語化を進めるとともに、利用者の多い英語による年間展示予定表の作成や、特別展の詳しい内容をホームページや総合案内をとおして提供する。展示更新による常設展示の魅力向上やレストランと提携した割引サービスの実施を継続するとともに、グッズの開発にも取り組み、博物館の一層の利用促進に努める。

8. 施設の維持管理

警備・案内・券売・清掃及び設備等の保守点検を専門業者に委託して、安全・快適な施設の維持管理と運営に取り組む。

IV. 大阪市立自然史博物館事業

大阪市立自然史博物館は、地元大阪を中心とした自然に関する展示や観察会などを通じて、市民に自然をよく知り学んでもらうためのさまざまな機会を提供し、共に自然と人間のよりよい未来を考えていくことを目的としている。この基本的な考え方のもと、平成28年度は以下の項目に重点的に取り組んでいく。

- ・ 市民参加による調査活動「プロジェクトA；大阪を中心とした「外来生物」調査プロジェクト」を実施する。
- ・ 自主企画の特別展「氷河時代展(仮称)」を企画・実施する。展示作成も含めて市民参加型で推進する。
- ・ 特別展「生命大躍進 脊椎動物のたどった道」(NHK大阪放送局・NHKプラネット近畿と共催)を開催する

1. 資料の収集、保管事業

動物・昆虫・植物・化石・岩石・鉱物等に及ぶ自然史資料を、大阪を中心としつつ、それと密接に関連のある資料は、日本全国さらには必要に応じて海外にまで対象地域を広げて収集する。特に、大阪との地理的關係から東アジア～東南アジア地域を重視する。

収集した標本は、マイナス45度の低温燻蒸を基本とし、必要に応じて薬品燻蒸処理を行った後、登録して収蔵庫内に最適な環境で保存し、展示や教育活動、外部利用者へのサービス等に積極的に活用する。また、これまでも取り組んできた標本情報のデジタル化や公開を今後も進めるとともに、収蔵資料目録を刊行する。

2. 展示事業

(1) 常設展示

常設展の展示資料の入替えを適宜行うとともに、子ども向け解説の増設やこれまで好評であったジオラボ、子どもワークショップ、探検クイズなど来館者と直接的に対話を行う事業を一層充実させていく。

(2) 特別展示

① 特別展「生命大躍進 脊椎動物のたどった道」

[平成28年4月16日(土)～6月19日(日)]

生命は40億年という膨大な年月をかけて現在の姿を獲得してきた。その過程には、生命に飛躍的な進化をもたらした“いくつかの重要な出来事”があった。たとえば「眼の獲得」「海からの上陸」「胎盤の獲得」などである。これらの生命進化の歴史は化石によって裏付けられる。化石はいわば、進化の歴史を振り返ることができるタイムカプセルと言える。

本展では、カンブリア紀の「バージェス頁岩(けつがん)動物群」やシルル紀の海の支配者「ウミサソリ」、進化の謎を解明した胎盤を持つ最古の哺乳類「ジュラマイア」、奇跡的

に95%の骨格が残る霊長類化石「イダ」など国内外から集めた貴重な標本に加え、精巧な復元模型、4K映像などを活用し、その“出来事”を進化の背景にあるDNAについても触れながら分かりやすく解説する。

＜展示コーナー＞

- ・生命誕生
- ・カンブリア大爆発
- ・海から陸へ
- ・哺乳類の出現と多様化
- ・人類への道
- ・受け継がれた DNA

＜主 催＞ 大阪市立自然史博物館、NHK 大阪放送局・NHK プラネット近畿

② 特別展「氷河時代展(仮称)」

[平成 28 年 7 月 16 日 (土) ～10 月 16 日 (日)]

長い地球の歴史の中で、気候は大きく変化してきた。これまでに、温暖な時代や氷河時代と呼ばれる寒冷な時代が繰り返し訪れた。そして実は現在も氷河時代が続いている。

近年、地球温暖化が問題とされているが、この先の人類の生き方を考えるためには、過去の地球環境の変化を知ることが必要となる。展示の中で、なぜこのような気候変動がおきるのかその仕組みを紹介し、過去の気候変動の歴史を振り返り解説する。現在まで続く氷河時代は寒い氷期と暖かい間氷期を繰り返しており、その変化の様子は過去 300 万年間にたまった大阪平野の地層や化石にも記録されている。この時代、日本列島にはゾウや巨大なシカが生息しており、今とは違った自然の様子をしていた。当時の自然の様子や、ゾウや巨大なシカがどのようにして日本列島にやってきたのかも、大阪周辺の地層や化石の研究成果や、当館の収蔵品を中心にご紹介する。

3. 調査・研究事業

博物館全体で取り組むプロジェクト調査、学芸員の個別テーマによる研究、館外研究者との共同調査研究を行うほか、市民参加による調査活動として、「外来生物に関する調査」を実施する。

基盤研究 A 「自然史系博物館等の広域連携による『瀬戸内海の自然探究』事業の実践と連携効果の実証」をはじめとした 9 件の科学研究費補助金による研究課題に継続して取り組む。

さらに各種の学術研究補助金など外部資金の新規獲得にも努める。

調査・研究の成果は、学会や当館主催の学芸ゼミで発表するとともに、当館刊行の研究紀要や学会誌に寄稿する。また「自然史セミナー」など市民向け講演会でわかりやすく解説する。

4. 普及教育事業

「やさしい自然観察会」・「テーマ別自然観察会」等の野外観察会と、室内実習・植物園案

内・ジュニア学芸員になろう！・博物館たんけん隊・ジュニア自然史クラブ・ジオラボなど博物館内で行うイベント、自然史オープンセミナーや講演会、「自由研究相談会」、「標本の名前を調べよう！」など多彩な事業を実施し、自然に親しみ、楽しく学べる機会を提供する。

新たなメニューを開発するなど事業の充実に努める。

5. 学校・市民等との連携

総合的な学習の時間やキャリア教育など学習活動のサポート、教員向け支援プログラムの実施、教材の貸出し、TMネットワーク（自然史博物館における教員と博物館のネットワーク）による情報提供等で学校教育を支援する。

「教員のための博物館の日」を8月に実施し、博物館が進める学校教育支援事業の理解を深めてもらう。

野外観察会補助スタッフ等のボランティアを行事毎に募集するほか、月例ハイク等の自然史博物館友の会事業に協力する。自然史科学関連のNPO法人などが実施する博物館連携に関する各種事業に協力する。

11月には、大阪周辺の関連団体に呼びかけて「大阪自然史フェスティバル」を開催する。

併設施設との連携についても、積極的に進める。当館は「長居植物園」内に立地しており、互いの相乗的効果を生かしていくことを大切にしている。毎月の相互連絡会を開催し、今後とも「長居植物園」の事業と密接な連携・協力を図っていく。また、27年度に開設した「バタフライガーデン」を利用した観察会などを実施する。

西日本自然史系博物館ネットワークの事務局館として、館相互の連携事業、展示技術の講習など研修活動を推進する。

6. 情報発信、広報宣伝

常設展の入館者増を図るため、当館のホームページを充実し、ツイッターなどSNSも活用して、年間を通じた利用促進を図る。また、館内パンフレット、ポスター・チラシを効率的に配布し、マスコミ発信や地域情報誌掲載を含めて、博物館活動全体の広報宣伝を積極的に行う。

また、展示解説書等の出版物を刊行し、成果の公表と市民の学習支援を行う。

さらに、月例のイベントリリース、特別展などの大規模事業のリリースを市政記者クラブや科学記者クラブなどに効果的に発信する。

7. 来館者サービスの向上

魅力ある展示事業や普及教育事業の展開に努め、来館者との対話を深め、一人一人のニーズに応えられるよう取り組むとともに、ゴールデンウィーク等の定例休館日の臨時開館、関西文化の日の実施等により、一層のサービスの向上を図り、利用の促進に取り組む。ホスピタリティ面では、長居植物園と連携をさらに強化し、受付案内・各種行事の共催等今まで以上にサービスの向上に取り組む。

8. 施設の維持管理

警備・案内・清掃を専門の業者に委託して、安全・快適な施設の維持管理に努める。

設備等の保守点検については、平成 26 年度より一括して設備管理の業務委託をしており、引き続き良好な施設の維持管理に努めていく。

V. 大阪市立美術館事業

大阪市立美術館は、昭和11年(1936)に開館して以来、多彩な美術作品の収集につとめながら、様々な国・地域・時代・作者に関する美術の展覧会や講演会・講座を開催し、魅力のある総合美術館として大阪における「文化と美術の情報拠点」となることをめざしている。平成28年(2016)は大阪市立美術館開館80周年の年に当たるので、特別展・特別陳列3本を「大阪市立美術館開館80周年記念」の記念事業とする。

平成28年度については、書聖と呼ばれる王羲之の書法を俎上へのせ日本と中国の書家による傑作を一堂にする特別展「王羲之から空海へ 日中の名筆 漢字と仮名の競演」をはじめとする4本の特別展と1本の特別陳列を開催する。また、所蔵品・寄託品によるコレクション展(平常展)では、より美しくよりわかりやすい展示となるように工夫を凝らして開催する。こうした展覧会の展示や講演・講座の開催、リニューアルした天王寺公園(てんしば)や周辺文化施設などとの連携などを通じて、市民の情操と知的好奇心を刺激し、学習支援とともに美術に対する関心を高めて、来館者の増加を図る。一方で、様々な展覧会や講演会・講座・論考・作品収集などのために美術作品の調査・研究を行い、より一層のホームページの充実を図るとともに、新たな美術情報の発信を行う。また、作品の収集・保管・貸出をはじめ、老朽化した施設と設備の維持管理にも万全を期す。

1. 資料の収集、保管・貸出等事業

日本や中国で制作された絵画・彫刻・工芸などを中心に、寄贈等による館蔵品と社寺や個人から預かる寄託品のさらなる収集に努める。また、それらを適切に保存・管理するための収蔵環境や、照明・展示ケースなどの展示環境を整えて作品を適切に収蔵する。あわせて、コレクション展(平常展)や特別展・特別陳列などで展示するとともに、貸出しによる他館の展覧会への出品や、他の研究機関などへの観覧に供する。

2. 展示事業

国宝、重要文化財の勸告承認出品館及び公開承認施設として、館蔵品や寄託品等の作品をより広く市民の方々に展示することに努める。そのため、一定のテーマによるコレクション展(平常展)の開催、館独自の企画に基づいて特別に所有者から作品を借用する特別展や特別陳列の開催、マスコミなどの共催者とともに開催し、日本の各地を巡回する多様な内容の特別展の誘致などに努める。これらの展示事業を通じて、市民の文化や情操・教養の向上とともに、学術の発展に寄与することを目指す。

(1) コレクション展(平常展)

市民をはじめ来館者の美術に対する関心を高めるため、館蔵品と寄託品から構成されるコレクション展を開催する。コレクション展は、当美術館活動の根幹と位置づけ、ホームページ等による広報をさらに充実する。

また、さまざまな小テーマを設定し、日本や中国の美術の楽しさを実感できるような展

示を行う。あわせて、最新の学術的知見を反映させる。

(2) 特別展・特別陳列

学芸員の調査研究の蓄積を基礎に、利用者のニーズを踏まえながら魅力あるテーマを設定し、特別展や特別陳列を開催する。全国を巡回する集客性が高く充実した内容の展覧会を誘致する。また、館藏品・寄託品などの作品を中心に新しいテーマで展示内容を再構成し、広報費などを予算化した特別陳列も自主企画により開催する。

①特別展「大阪市立美術館開館 80 周年記念 王羲之から空海へ一日中の名筆 漢字と仮名の競演」

〔平成 28 年 4 月 12 日（火）～5 月 22 日（日）〕

主催：大阪市立美術館、読売新聞社、公益社団法人日本書芸院

日本の書法史においても中国南北朝時代の書家である王羲之の法帖やその流れをくむ作品の影響は大きく、特に関西では王羲之を学んで自身の作風を形成した書家を数多く輩出した。本展では王羲之以来の書法の伝承を、中国書蹟では王羲之・王献之の精拓から、初唐三大家、宋四大家、元の趙孟頫や明の文徵明などを経て明末清初の王鐸に至る作品から、日本書蹟では飛鳥・奈良の写経から空海・嵯峨天皇、小野道風・藤原佐理、高野切れなどの平安古筆を経て江戸期に至る作品などによって明らかにする。国宝・重要文化財をはじめ、台湾の国立故宫博物院や何創時書法藝術基金會が所蔵する日本初公開の作品など総数約 230 点の傑作を一堂にする。

②特別展「大阪市立美術館開館 80 周年記念 デトロイト美術館展

大西洋を渡ったヨーロッパの名画たち モネ ルノワール ゴッホ セザンヌ ピカソ」

〔平成 28 年 7 月 9 日（土）～9 月 25 日（日）〕

主催：大阪市立美術館、関西テレビ放送・産経新聞社

ミシガン州南東部の都市デトロイトは、自動車工業都市として発達してきたが、1885 年に設立されたデトロイト美術館は、多くの企業パトロンの支援によって、ヨーロッパ絵画をはじめ、古代エジプト美術から現代美術までを所蔵する、全米屈指の美術館として高い評価を得てきた。一方、自動車産業の斜陽化に伴うデトロイト市の深刻な財政難により、このコレクションも売却の危機にさらされたが、市民や周辺自治体、国内外の資金援助など、美術館を守ろうとする運動が盛んになって、デトロイト市の文化的資源として存続することとなった。本展は、ヨーロッパの近代絵画の珠玉の作品群の中から、印象派やポスト印象派を中心に 20 世紀のフランス絵画・ドイツ絵画など総数 52 点の名品を展示する。

特に、ファン・ゴッホによる黄色い帽子をかぶった「自画像」（1887 年）は、アンリ・マティスの「窓」（1916 年）とともに、最初に大西洋を渡ってアメリカにもたらされたゴッホの自画像として知られている逸品である。

③特別展「第 62 回全関西美術展」

〔平成 28 年 10 月 14 日（金）～10 月 26 日（水）、10/20（木）休館、10/17・24（月）は開館〕

主催：大阪市立美術館、読売新聞社

大阪の芸術振興を図るため、昭和 16 年に「大阪市展」として発足した日本画・洋画・彫刻・工芸・書の 5 部門の公募展で、新人作家の登竜門とも呼ばれている。

平成 28 年度より外部有識者を加えた審査方法などの改革と支出経費の削減を行った。

応募作品の中から選ばれた入選作品と関西在住の招待作家の作品、あわせて約 900 点を展示し、関西における現代美術の動向の一端を概観する。

④特別陳列「大阪市立美術館開館 80 周年記念

館蔵品・寄託品による 大阪に集まった日本美術・東洋美術の名品（仮称）」

〔平成 28 年 11 月 8 日（火）～12 月 4 日（日）〕

主催：大阪市立美術館

大阪市立美術館は、市民が優れた美術文化に接する機会を提供し、生活に潤いをもたらすとともに、美術家の活動を助成し、広く大阪の文化振興に資することを目的として、昭和 11 年 5 月に開館した。様々な国や地域、古代から現代までの多様な美術展を開催し、コレクション展（平常展）では購入や寄贈によって集まった日本・中国の絵画・彫刻・工芸など 8000 件をこえる館蔵品と、関西一円の社寺や個人などからお預かりしているおよそ 5000 件の寄託品を随時陳列し、講演会などの教育・普及事業を合わせて実施してきた。

国宝・重要文化財に指定された作品や美術館が所蔵する大型のコレクションを中心に、80 年間の様々な事業を通じて本美術館が収蔵することとなった館蔵品と寄託品を一堂にすることで、本美術館が関西の美術活動にどのような寄与を果たしてきたかを明らかにする展覧会である。

⑤特別展「改組 新 第 3 回日展」

〔平成 29 年 2 月 18 日（土）～3 月 20 日（月・祝）〕

主催：大阪市立美術館、公益社団法人日展

審査方法と組織改革などを行って公平性・透明性を確保し、生まれ変わった「改組 新 日展」の第 3 回展を開催する。平成 28 年度も日展所属の会員などの作家の作品やこの年の入選作品による基本作品と、大阪・奈良・和歌山・兵庫の 4 府県の地元作家の入選作品とのあわせて約 600 点を展示し、日本の具象美術に関する現代の動向の一端を概観する。

3. 調査研究事業

開館以来の調査研究活動の実績をもとに、他の博物館施設や各学会との連携を行って独自企画の展覧会を実現させ、講演会・シンポジウムなどを開催するとともに、国内外の各種学術雑誌や大阪市立美術館発行の図録・紀要などに論文やエッセイなどを掲載する。

また、平成 25 年度に科学研究費助成の申請対象研究機関として指定を受け、外部資金を活用しながら研究を進め、その成果を積極的に発表し、今後のさらなる学術発展に寄与する。

4. 教育・普及事業

大学との連携事業として博物館学の実習生の受け入れや将来学芸員を目指す大学院生を対象としてインターン（研修生）研修を実施し、あわせて教職員などへの研修も実施する。また、美術の鑑賞学習などの学校行事にも学芸員が対応し、教員からの美術教育への相談に応じながら、児童・生徒に美術に関する充実した学習の機会を提供するとともに教職員研修等も実施する。さらに、小中学生や市民を対象とした絵画制作などの体験学習会「美術館へ行こう」を春・夏・冬にそれぞれ開催する。

5. 学校・市民等との連携

各種市民団体による見学会を誘致し、また作品解説等を行なって市民が美術により広く触れる機会を提供するほか、各種団体との協働に努め、幅広い市民ニーズに対応できるよう様々な検討と実践に努める。また、天王寺区役所、浪速区役所や新世界地域の団体と連携して、コンサート等のイベントを開催し、地域との協働に努める。加えて民間企業と例年実施している障がい者のための特別鑑賞会の実施にも取り組んでいきたいと考えている。

また、100周年を迎えた天王寺動物園、「てんしば」の愛称で市民の憩いの場にリニューアルした天王寺公園、新世界・通天閣エリア一帯の魅力創出事業として開催される各種事業、などについて、天王寺動物園事務所や地元各種団体と連携し取り組んでいく。

6. 情報発信・広報宣伝

ホームページの一層の充実をはかり、市民や多様な利用者に対して、展覧会や各種イベント、お知らせ等の情報をリアルタイムに提供できるように努める。また、学芸員による展覧会の見所や最新の情報等を分かり易く掲載し、より多くの人々が美術館に興味や親しみを抱けるように、情報発信力を強化する。また、展覧会スケジュールや特別展・コレクション展（平常展）の情報を掲載した広報誌「美をつくし」を、年2回（3月、9月）発行するとともに、展覧会開催ごとに市内の各種施設をはじめ地下鉄などへのポスター・チラシなどを配布、さらに大阪市の各所属が発行する広報誌やメディア各社への情報提供を通じて、新聞・雑誌などの媒体で広く広報・宣伝活動を行う。さらに、グーグルアートへの作品画像の提供により美術館の優れたコレクションを世界にアピールしていく。

また、天王寺公園エリアの魅力向上を目指して、大阪市や関係先と連携して、天王寺公園の魅力発信・情報発信をしていく。なお、「てんしば」の開園に際しては、近鉄不動産とも協議し公園入り口付近のデジタルサイネージで当館の展覧会案内表示を無料で実施し、またポスターの掲示場所も確保した。

7. 来館者サービスの向上

天王寺ゲートから美術館への案内サインや館内のサイン表示の改善をはじめ、展示品のわかりやすい説明など観覧者にやさしい環境作りを行う。また、ご意見箱や受付窓口に寄せられる利用者の要望やアンケート調査の分析結果などを職員が共有することにより、市民の生

の声を的確に美術館活動に反映させ、来館者のサービスの向上に努める。

8. 施設と設備の維持管理

設備の修理・修繕については、限られた予算を有効に活用しながら、効果的な予算執行に努める。特に、空調設備の整備や外壁改修などについては、経済戦略局と協議しながら対応する。また、作品の保護と保全に関する空調能力の維持及び利用者が快適かつ安全に施設を利用できるように取り組むとともに、施設を衛生的に保持し、館内外の美観保持に努める。

さらに、人と機械による 24 時間警備を行うなど、作品と利用者にとって安全で快適な施設の維持管理に努める。

9. 美術研究所・友の会事業

美術研究所が行っている実技指導・コンクール・体験学習会「美術館へ行こう」などの事業と、友の会が実施している毎週日曜日の絵画教室「日曜洋画会」などの事業の双方を協会の自主事業と位置づけ、美術研究所・友の会運営委員会を開催し、双方の有機的な連携を図りながら、技術の向上と美術の振興に寄与する。

VI. 大阪市立東洋陶磁美術館事業

東洋陶磁美術館は、大阪市が世界に誇る「安宅コレクション」「李秉昌イ・ビョンチャンコレクション」などの東アジアの陶磁器コレクションを収蔵・展示する陶磁器専門美術館である。優れた館蔵品による平常展示を、より多くの市民に紹介することによって、東洋陶磁の魅力をアピールし、市民の文化や教養の向上に寄与することに努めている。また、市民からの要望が高い分野の美術工芸品を紹介することにより、陶磁器愛好家にとどまらない利用者層の拡大もめざしており、平成28年度は、明治時代から大正時代にかけて日本の輸出用陶磁器を推進するため、万国博覧会で数度にわたり活躍した初代宮川香山（1842～1916）の業績を紹介する。さらに、中国北宋時代の名窯・汝窯を代表する青磁水仙盆の名品が一堂に集う特別展を台北 国立故宫博物院との共催により日本で初めて開催する。また、館蔵品のなかから朝鮮時代の水滴約100点を厳選した企画展を開催し、愛らしく美しいその姿とともに、当時の文人たちの精神世界を紹介する。これらの事業を広報普及活動により積極的に情報発信し、広く市民に観覧の機会を提供する。

1. 資料の収集・保管事業

収蔵資料を基に、より特色のある質の高いコレクションの形成のため高い専門性を生かして効果的、効率的な収集計画を作成する。また、芸術的あるいは資料的価値の高い作品の寄贈受入に努める。それらを適切に保存・管理するため、収蔵環境を整え資料の保全を図る。

さらに、東洋陶磁その他これに関する研究資料、文献、写真等を収集・整理し、東洋陶磁の研究拠点として充実を図る。

2. 展示事業

(1) 平常展（常設展）

安宅コレクションの中国陶磁・韓国陶磁、李秉昌イ・ビョンチャンコレクションの韓国陶磁、日本陶磁の中から代表的作品を中心に約300点をそれぞれ陶磁史の流れに沿って展示する。あわせて、沖コレクションの鼻煙壺約100点を展示し、陶磁器以外にも中国の美術工芸品を紹介する。

また、平常展に変化と多様性を持たせるため寄贈作品を中心に約20～30点をテーマ・ジャンルごとに企画構成する特集展示を次のとおり開催する。

①「李秉昌イ・ビョンチャンコレクション 韓国陶磁」 [平成28年8月13日(土)～11月27日(日)]
李秉昌イ・ビョンチャンコレクションの代表的な作品約20点により、韓国陶磁の美を紹介する。

②「宋磁の美」 [平成28年12月10日(土)～平成29年3月26日(日)]
館蔵の中国宋時代の陶磁器を中心とした約30点により、宋磁の多彩な魅力を紹介する。

(2) 特別展

①「没後100年 宮川香山」 [平成28年4月29日(金・祝)～7月31日(日)]
ヨーロッパで19世紀後半から万国博覧会が華やかに開催された頃、日本の窯業界は、西

洋の焼成法などの紹介によって新たな時代へと入った。この中にあって初代宮川香山(1842～1916)は、横浜で輸出用陶磁器の制作に没頭し、1876年(明治9)のフィラデルフィア万博から次々に発表し、数多くの受賞を果たした。

今回の展示では、香山前期の「高浮彫」から、後期の中国古陶磁と釉薬の研究による作品に至るまで、日本の近代陶芸を牽引した香山の全貌を田邊コレクションを中心に約140点で紹介する。

なお、本展は同時期に開催する大阪歴史博物館の特別展「近代大阪職人図鑑」と事業連携を行い、それぞれの半券提示で団体料金とする入館者相互割引を行う。

②「台北 国立故宫博物院—北宋汝窯青磁水仙盆」

[平成28年12月10日(土)～平成29年3月26日(日)]

中国北宋時代(960～1127)末に宮廷用の青磁を焼成した汝窯は、「天青色(てんせいしょく)」とも形容される典雅な釉色と端正な造形を特徴とし、中国の青磁の頂点に君臨する。

本展では、台北の国立故宫博物院から、汝窯の最高傑作であり、中国陶磁の名品中の名品といわれる「青磁無紋水仙盆」をはじめとした北宋汝窯青磁水仙盆4点と、さらに清朝の皇帝がその「青磁無紋水仙盆」を手本につくらせた景德鎮官窯の青磁水仙盆1点が初めて揃って海外に出品される。そして、日本を代表する汝窯青磁である当館の青磁水仙盆と歴史的な「再会」が実現する。初めて一堂に集った汝窯青磁を代表する青磁水仙盆の名品を通して、歴代の皇帝たちが愛した汝窯青磁の美の真髄を紹介する。

(3)企画展

「朝鮮時代の水滴—文人の世界を遊ぶ」

[平成28年8月13日(土)～11月27日(日)]

硯に水を注ぐ水滴は、筆・墨・硯・紙の文房四宝とともに文人の書斎を飾るものである。

朝鮮時代(1392～1910)の水滴は、動物や果実、家形、山形をはじめとする多様な姿をそなえ、さまざまな文様や銘文がほどこされ、そこには高節、清貧、富貴長命など文人の理想や世界観が詰め込まれている。この時代は儒教が国の指導理念であり、文人や支配層は儒教の思想や徳目の実践に努めた。そのおもな空間が、文人たちが学問に励み、思索にふけり、また客を迎えて政治や学問を論じる舎廊房(サランバン)という書斎である。そこに飾られる質素で気品ある家具や文房具のひとつが、水滴である。

本展では、館蔵品のなかから厳選した朝鮮時代の水滴約100点によって、愛らしく美しいその姿とともに、当時の文人たちの精神世界を紹介する。

3. 調査・研究事業

東洋陶磁その他美術に関する調査研究事業として、科学研究費等の外部資金の活用も含め、中国陶磁、韓国陶磁、日本陶磁に関する研究・窯址調査等を行い、その成果を展示・講演活動等により市民へ還元するとともに、学会での研究発表などにより学術の発展に寄与する。

4. 教育・普及事業

(1) 講演会等の実施

展覧会の内容の理解促進や、調査研究の成果を還元するため講演会、講座、研究会等を開催する。

- ① 特別展などにおける外部講師による講演会の開催
- ② 講座、レクチャーなどの開催
- ③ 東洋陶磁学会、民族藝術学会などとの提携による研究会などの開催

(2) ボランティアによるガイド事業

平常展の展示期間中、土・日・祝日の午前と午後にボランティアによるギャラリーガイドを行う。平日も予約によるガイドを実施。ボランティアガイド事業の充実を図るため、学芸員が随時研修を行う。なお、本年度より新たに第5期ボランティア11名が加わって活動を行う。

5. 各種団体との連携

協会が運営する各館・所との連携強化を図るとともに、各種団体、学校等との連携により、効果的な広報活動と入館者へのサービスの充実を図る。また、周辺各施設と連携し、中之島地域の活性化に協力する。

6. 情報発信・広報宣伝

ホームページをより一層、充実・活用して、展覧会情報等を分かり易く掲載するなど、情報発信力を強化する。また、館案内パンフレット、年間展示予定、ポスター・チラシ、マスメディアなどにより、東洋陶磁美術館の活動を広く周知し、来館者の増につなげる。

グーグルアートなどとの提携により、優れたコレクションを世界に向けて情報発信する。入館者に対するアンケート調査を随時実施し、入館者の要望等を事業に反映するとともに、効果的な情報提供、広報活動等に活かす。

7. 来館者サービスの向上

来館者のニーズに応じた案内サインの改善、解説などの外国語表記の充実、ボランティアによるギャラリーガイドなど、サービスの向上に努める。

また、昨今の外国人来館者の増加に伴い、Free Wi-Fi 接続の要請も高まる中、当館でも4月から Osaka Free Wi-Fi Lite を導入する。

さらに、Beacon システムを利用した、館内誘導、日本語による常設展示の音声ガイド、外国語(英・中・韓)による常設展示の作品解説などの来館者サービスの実証実験を本年度通年で実施する。

8. 施設の維持管理

利用者が安全かつ快適に施設を利用できるよう全ての施設、設備の適切な維持管理を行う。

9. その他事業

(1) 出版等事業

展覧会図録、館蔵品図録、関連書籍、ミュージアムグッズなどの製作・販売を行う。

ミュージアムグッズについては、来館者から寄せられる要望を反映した新規商品の製作を行う。

(2) 友の会事業

友の会は、東洋陶磁美術館の存在意義を評価し、収集・調査・研究・学术交流等の活動を側面的に支援して、美術館の一層の発展と充実を図ることに賛同する会員で組織されている。

講演会などを通して会員へ東洋陶磁に関する情報提供等を行う一方、美術館の利用促進や普及活動などに会員の協力を求めるなど相互連携を図る。